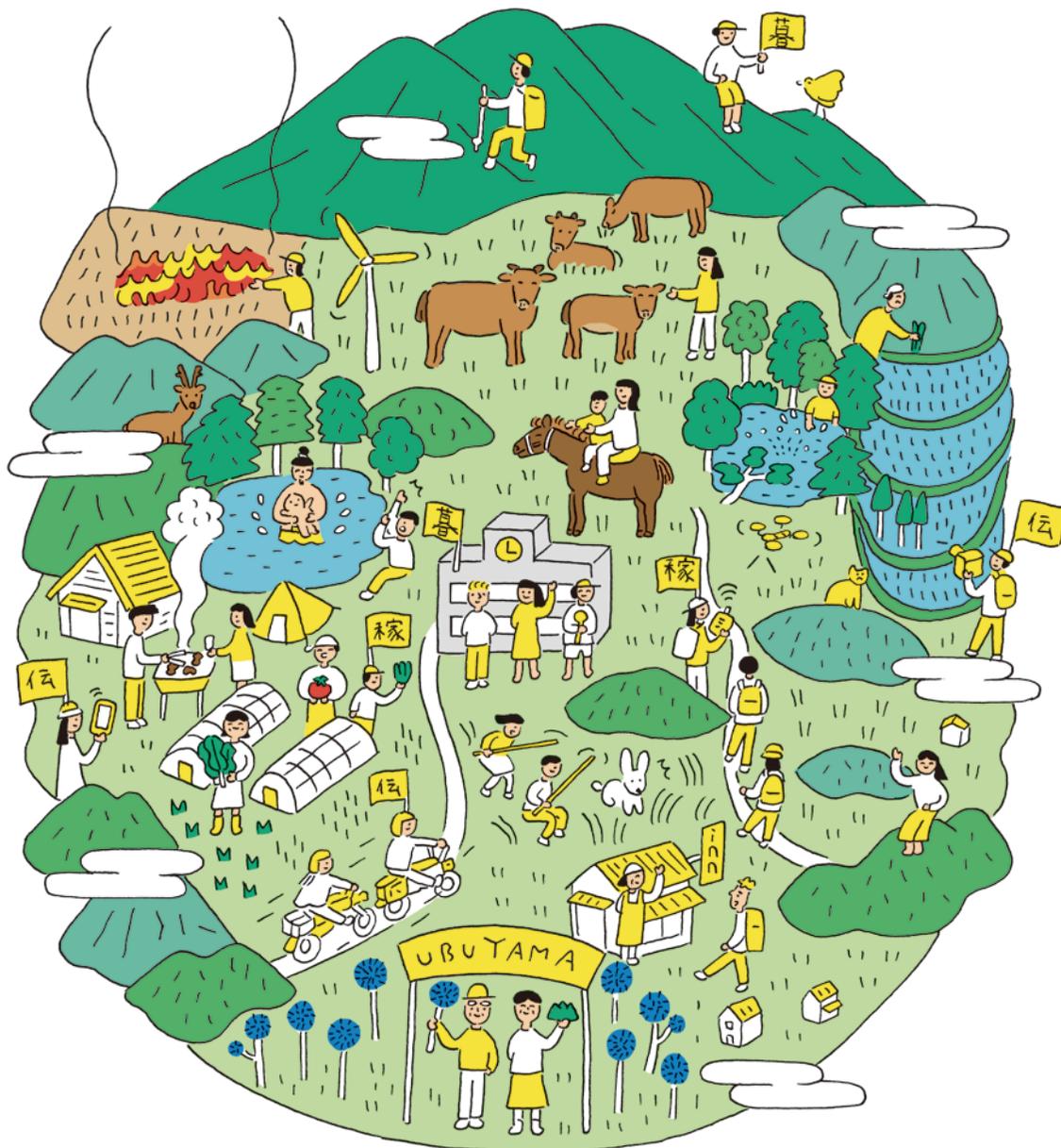


うぶやま未来計画

う

ぶ

小さきことは、美しきこと。



2020—2029年度 第6次産山村総合振興計画

や

Ubuyama Sustainable
Community Plan

ま



う

ぶ

うぶやま未来計画
小さきことは、美しきこと。
Ubuyama Sustainable
Community Plan

2020—2029年度
第6次産山村総合振興計画

や

ま

2040年

産山村は、かつて小さな村だった。

産山村は、いまも小さな村である。

自然と村民は、相思相愛でなければならない。
自然の恩恵を享受し、それを富に変える。
人が残り、人がやって来て、世代が続く。
時代が変わり、技術がさらに進化してもそれは同じ。
自然への恩義は、丁寧な手入れで返す。
守りながら、活かし方を考える。
一人ひとりが考え、実行する。
この村が栄えて、美しい自然が残り、
それを次世代に手渡せるように。
産山村は、小さくて、やさしくて、強くて、
笑顔に満ちた村をめざします。

うぶやま未来計画 2040年 産山村の将来像より

目次

序章	2
第1章—うぶやま未来計画	5
1—うぶやま未来計画とは	6
2—計画の作り方	8
3—産山村のこと	9
4—産山村の強み	12
5—産山村の弱み	14
6—産山村の可能性	15
第2章—考え方と実現の仕方	17
1—2040年の将来像	18
2—2020年宣言	19
3—4つの目標	20
4—6つの戦略	21
稼ぎ上手、伝え上手、暮らし上手の村になる	22
5—財政面の現状	23
トピック—産山学園のこと	24
第3章—うぶやま未来計画の実践	29
戦略1—しっかりと稼ぐことができる村	30
戦略2—ちゃんと伝えることができる村	31
戦略3—興味が湧き訪れたい村	31
戦略4—手厚い教育をさらに進める村	32
戦略5—移住して来たい住み続けたい村	32
戦略6—一緒に頑張り協働で生きる村	34
最後にこれからのこと 産山村の未来は、みんなでつくる。	35
巻末資料	36



第1章

うぶやま 未来計画



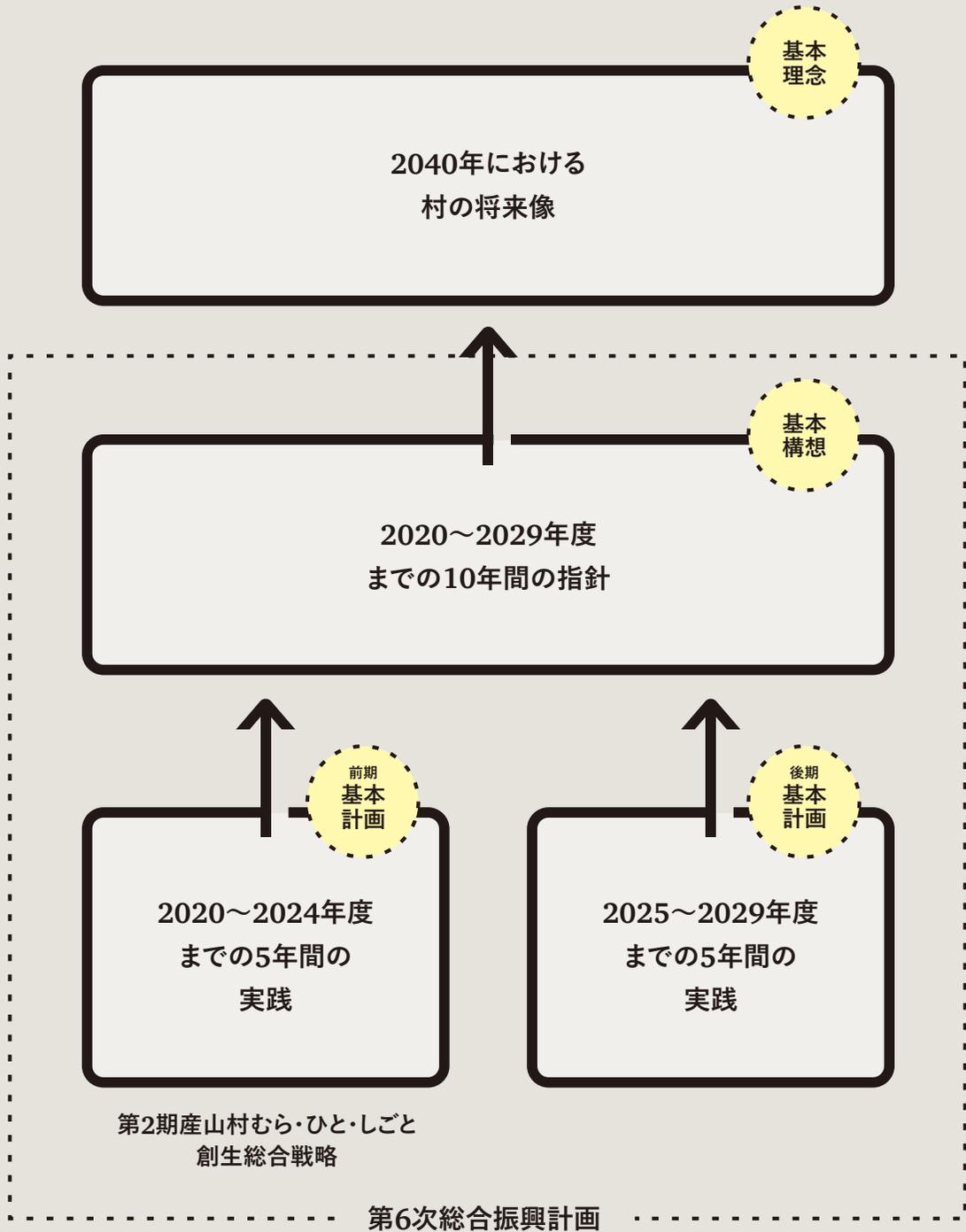
1——うぶやま未来計画とは

1888年4月、法律一号をもって「町村制」が発布。これにより阿蘇郡124ヶ町村は26ヶ町村にまとめられ、波野郷の12の村は波野村と産山村に分離合併しました。それから120年余の2010年、新たに起こった平成大合併の際には、産山村は合併を行わないことを選択しました。小さな村として生きていくことを選択したのです。そしていま、今後の急激な人口減少、高齢化によって、村の資源をどう生かし守りながら、持続的な村づくりを進めていくかが、これからの大きな課題となっています。では、これからの20年、産山村をどのようにしていけばいいのでしょうか。そこには計画が必要です。言わば、未来へ向かう地図のように。そして、計画をつくるために村民の皆さんの声を聞くことから始めました。

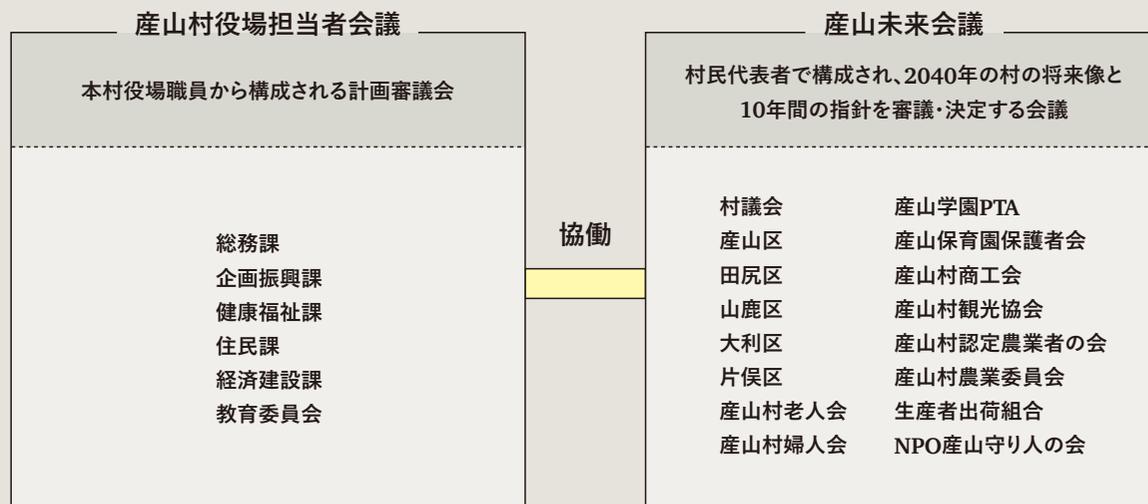
今回、2040年の将来像を定め、そこに向かうための羅針盤となる計画を作ります。計画には、2020年度から2029年度までの10年を課題別に具体的な施策までを示した総合振興計画があり、さらに、総合振興計画の前半5年の基本計画は産山村むら・ひと・しごと創生総合戦略を含む形で構成されています。

そして、これらすべてを「うぶやま未来計画」と呼ぶことにしました。うぶやま未来計画は、村民みんなで考えた、未来への地図と言ってもいいでしょう。以下、その全体像とその進め方、そしてそれぞれの中身を詳しく説明していきます。

うぶやま未来計画全体図

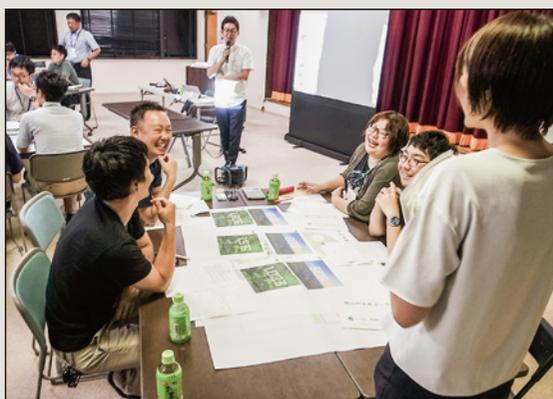


2— 計画の作り方



1— 計画の審議・決定機関

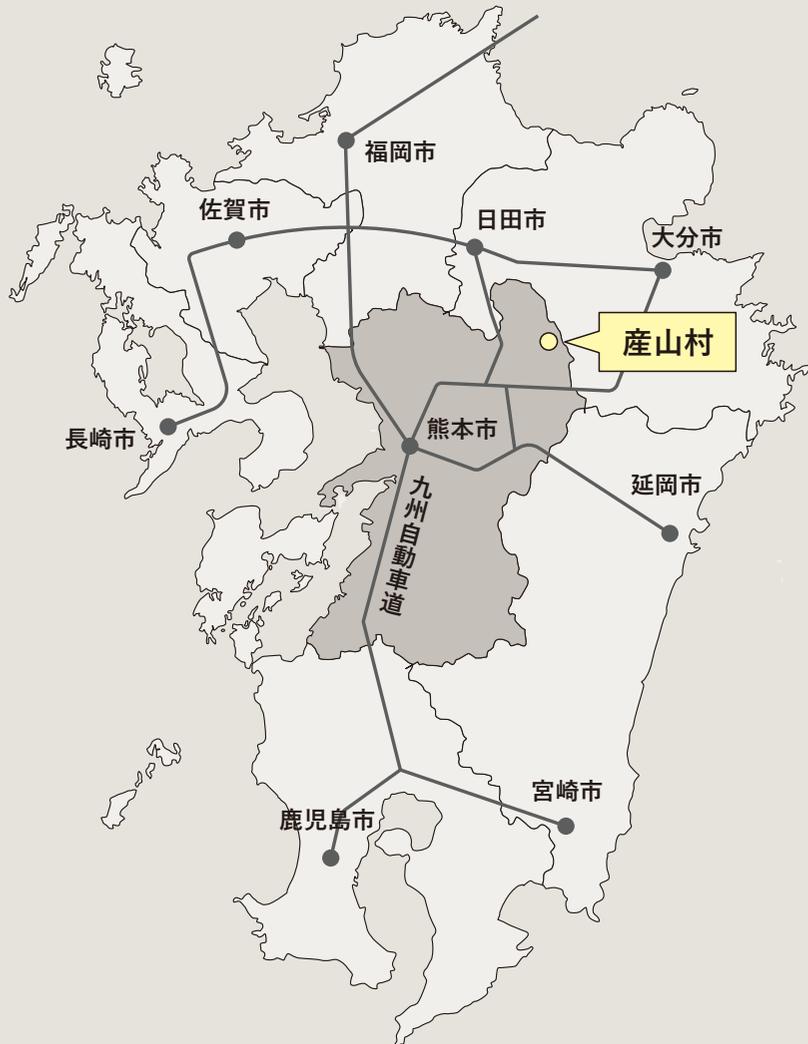
うぶやま未来計画を進めるにあたり、村民代表18名の「産山未来会議」を立ち上げました。並行して行政職員を招集し、「産山村役場担当者会議」を設置しました。そして、2040年の村の将来像と10年間の指針を決定しました。



2— 住民意見のとりまとめ

うぶやま未来計画をつくるにあたり、住民アンケートや地区座談会、各種団体等への聞き取りを実施し、村民のたくさんの声を集めました。産山村の未来について考えるために、約半年をかけて産山未来会議を開催しました。この会議で出た意見が、うぶやま未来計画の2040年の将来像、2030年に向けた指針の基礎となっています。

3— 産山村のこと



1— 山々に囲まれた神様が生まれた村、産山

産山村は熊本県の北東部、九州のほぼ中央にあります。阿蘇北外輪と九重連山に囲まれた、東西6km、南北10km、総面積60.81km²の高原と山林の小さな村です。阿蘇市、南小国町、大分県竹田市の3つの市と町と隣接しています。標高が480m～1,050mと高いことから、夏は涼しく、冬は寒さが厳しい土地ですが、冬の積雪量はあまり多くありません。天候は九州の屋根である九重連山の影響を受け、変化に富み、昼夜の気温は大きな格差が見られます。

2—産山村の人口

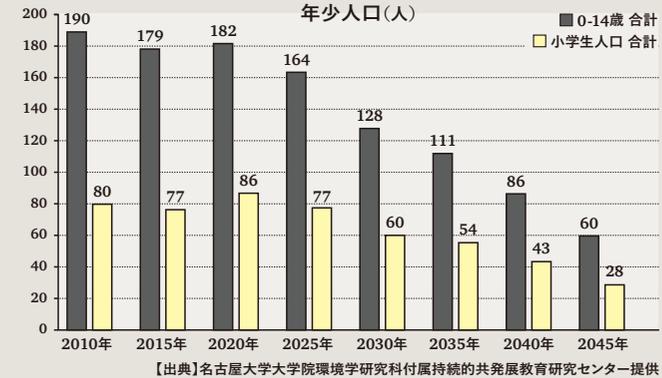
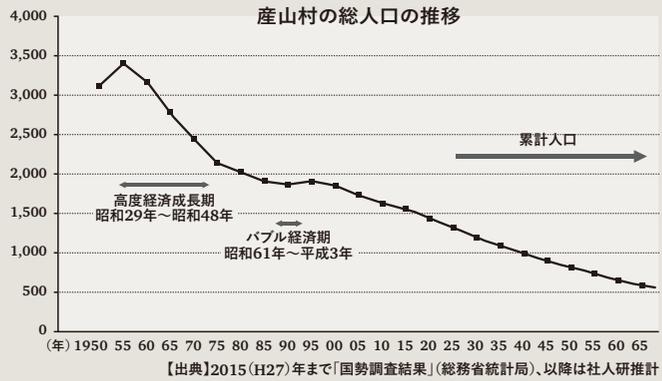
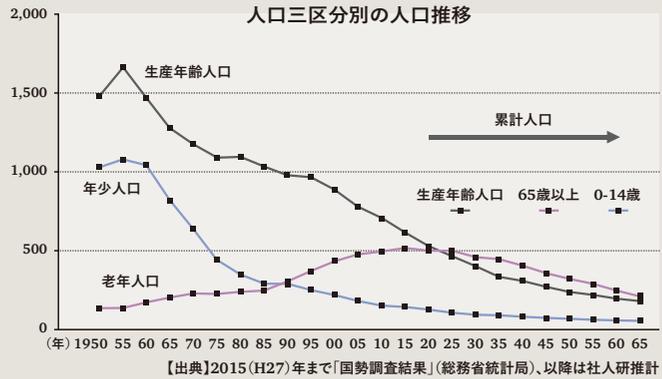
2019(平成31)年3月末時点の人口は1,512人¹です。国立社会保障・人口問題研究所の「日本の地域別将来推計人口」(以下「社人研推計」という。)によると、2040年には946人まで減少する見込みです。高齢化も進み、人口減少や少子化も重なって超高齢社会となります。中小一貫教育を行う産山学園も、このままだと複式学級化を検討しなければなりません。

¹住民基本台帳より

3—産山村のしごと

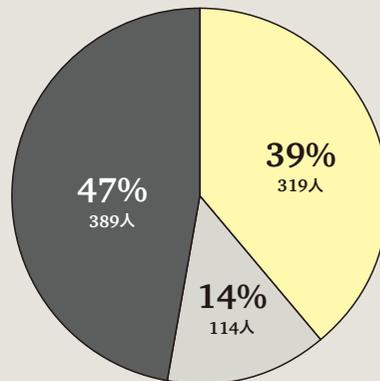
産山村の第1～3次産業の割合を見てみると、産山村で最も従事している人が多いのは、サービス業が中心の第3次産業であることがわかります。次いで、農林業の第1次産業が約4割を占めていました。製造業等が中心の第2次産業は2割以下と少ないことがわかります。

2



3

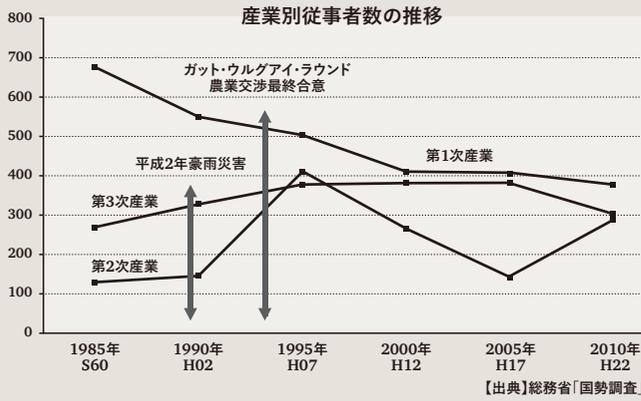
2015年の産業別従事者人数



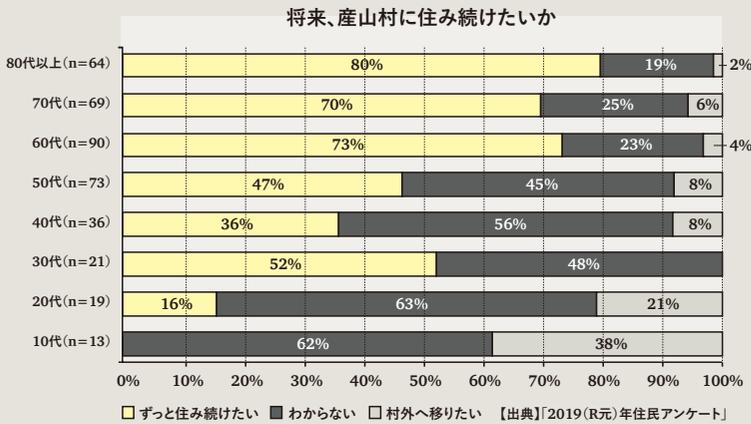
■ 第1次産業 □ 第2次産業 ■ 第3次産業

【出典】「国勢調査結果」2015年

4



5



6



4—産業別従事者数の推移

産山村では、1960(昭和35)年頃から第1次産業従事者が減少しています。第1次産業従事者の減少は年々進み、2005年から2015年の10年間で約2割減少しています。反対に第3次産業の就業者構成比が増加傾向にあり、近年は第1次産業を上回っています。

5—産山村に将来住み続けたい

うぶやま未来計画をつくるにあたり、住民アンケートにて「産山村に住み続けたいか」という気持ちを確認しました。その結果、10～20歳代の6割が「わからない」と回答しており、「村外へ移りたい」という回答も多くなっています。一方で30歳代、50歳代以上の約半数以上が「ずっと住み続けたい」と回答しています。

6—産山の公共施設、インフラ資産について

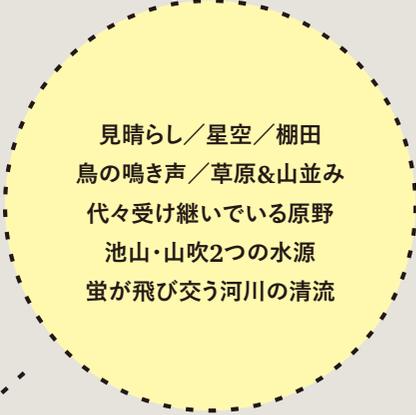
産山村は、1970年代から公共施設やインフラ(道路・橋梁等)の整備を進めてきました。産山村は県内自治体の中で、村民一人あたりの公共資産額が第2位です。現在は整備後30年以上経過する施設も増え、今後、修繕、建替えが必要になります。今後は未来への投資としてのインフラ整備を厳選し、既存施設を活かすことが求められています。

4— 産山村の強み

足下の宝に気づくことが、村づくりの第一歩です。住民アンケートや地区座談会、各種団体等への聞き取りなどを通して、たくさんの産山村の良いところに関する意見が集まりました。言わば、産山村の強み。数多くの意見の中から、産山村の特徴的な強みをまとめてみました。

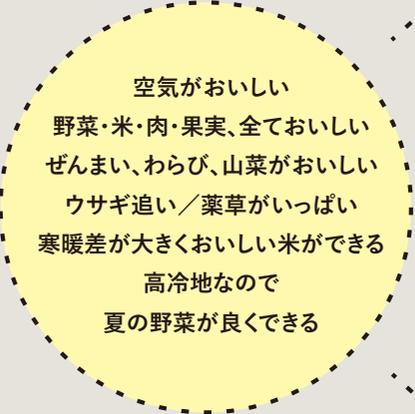
1— 産山村の美しい自然

多くの方が、自然の豊かさを挙げました。特に高原と水源は、その代表と言えるでしょう。どこまでも続く草原、こんこんと湧き出す水、くじゅう、阿蘇、祖母傾が見渡せる眺望、等々。産山村は絶景の中にあります。



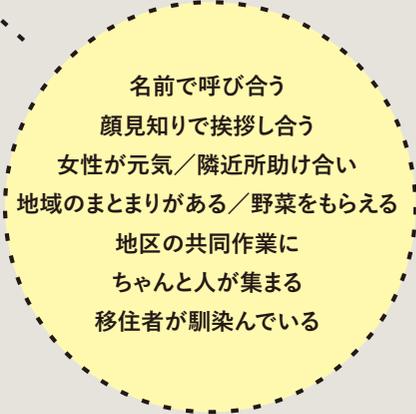
美しい自然

自然のめぐみ



2— 産山村の豊かな恵み

産山村の自然がさまざまな恵みをもたらす、と感じている村民は想像以上にたくさんいました。豊かな自然がもたらすおいしい農畜産物や山菜。寒暖差が米をおいしくし、それを使った酒もおいしい。産山村は自慢の風土を持っています。



ヒトのつながり

3— 産山村の温かな人のつながり

自然と並んで多かったのが、地域社会への賛美でした。地区の共同作業に人が集まるとか、女性が元気だとか、移住者が馴染んでくれるとか、産山村では、いまも温かで心地よい人のつながりが生きているようです。

手厚い教育

教育に対して補助が多い
 子育てしやすい／ヒゴタイ交流
 子どもが伸び伸び
 少人数学級によるきめ細かい教育
 子どもの体験活動が豊かで
 地域の協力体制も
 しっかりしている

4—産山村の手厚い教育

英語教育、IT導入のいち早い取組み。行政の施策の中で、ひときわ目立っているのが、教育に対する姿勢です。小中一貫の産山学園を中心に、子ども重視のプログラムがいくつもあります。

5—産山村の住みやすい環境

面白いのは、信号がないことやコンビニがないことを強みだと考える村民も少なからずいたこと。産山村ならではの豊かさの指標が見えてきました。

村がコンパクトなこと 距離が近い
 意外と交通の便が悪くない
 夏が涼しい／静か／治安が良い
 車が少ない／信号がない
 コンビニがない
 時間がゆっくり流れている

住みやすい環境

里山の暮らし

椎茸の原木栽培
 高齢者が現役で働いている
 野焼き／畜産／半自給の暮らし
 農業後継者が多く
 若い世代が帰ってくる
 自然と共に循環する生活

6—産山村の継承される暮らし

代々続いてきた村の暮らしを挙げる声も多々ありました。牛飼い、野焼き、半自給という昔ながらの生活がいまも存在している。産山村は、時代に合わせ進化しつつも、時代を超えた営みを大切にしている村でもあります。

5—産山村の弱み

産山村には、さまざまな強みがある反面、弱み、つまり課題もたくさんあります。アンケートや地区座談会、各種団体への聞き取り、産山未来会議を通して、複数の不安や問題点が浮かび上がりました。同様の課題も多く、ここでは大きく4つに分類しています。それぞれの課題は相互に深く関係している点にご注目ください。

子どもが少ない
地域の繋がりが少なくなってきた
神社の行事や草刈りに人が
集まらなくなった
消防団員が減った
農地が手入れできず荒れる

1—人口減少

産山村では、子どもたちは高校から村外に出てしまい、戻ってこない傾向が強く、高齢化とあわせて、働き手が減り続けている現状があります。

2—産業（農業・林業等）の衰退

高齢化の進行、若い世代の減少で、農業を中心とする村の産業の衰退が目立ちます。雇用の機会が減ると、人口増加の鍵を握るUターンやIターンも困難になります。

鳥獣被害が増えた
山林がお金にならない
観光で生計が立てられない
働く場所がない仕事がない

運転が出来なくなったら
買い物・通院・通勤に困る
生鮮食品を買えるお店がない
村には診療所しかない
老々介護が増える

3—買い物、医療難民の増加

買い物や病院に行きづらい。いわゆる買い物難民、医療難民の増加は、高齢化や後継者不足が原因の最も深刻な悩みと言えます。また、高校通学者の保護者の負担も大きな問題です。

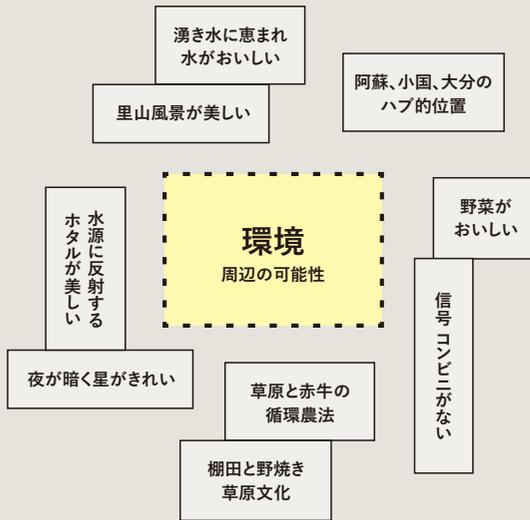
4—公共施設の老朽化の課題

財政課題の筆頭とも言える問題です。公共施設は確実に老朽化し、維持管理費は増加の一途です。新築する財政的余裕がない中、公共施設のあり方が問われています。

公共施設が古くなった
村営住宅が古く、修繕が必要
道路や水道施設が劣化してきた
修理や維持にお金がかかる

6—産山村の可能性

産山村の強みと弱みをじっくり検証していく過程で、まだ実現できていないけれど、方法によっては、状況を好転できそうなさまざまな可能性も見えてきました。強い部分をさらに伸ばすことで、弱い部分を補完しつつ、産山村の総合力を上げる視点が必要です。

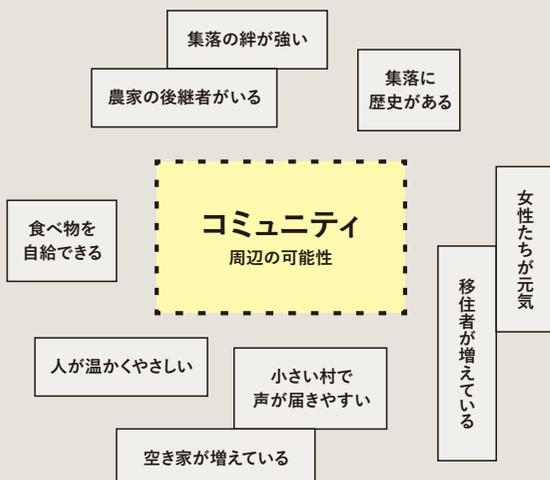
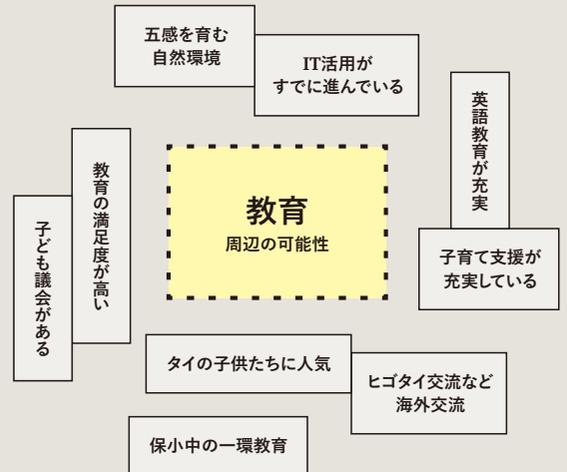


1—環境が持つ可能性

産山村の草原と水源は、かけがえのない、世界に誇るべき宝。しかも、それは水をはじめ農畜産物の価値を引き上げ、産山村のブランドイメージを高めてくれる、願ってもない要素です。

2—教育が持つ可能性

さまざまな意見が集まる中、改めて教育に注ぐ村のエネルギーの大きさに気づきました。保育園からの英会話教育、長年の海外との交流、IT導入にも積極的です。質の高い教育環境は、子どもたちへの最大の贈り物です。



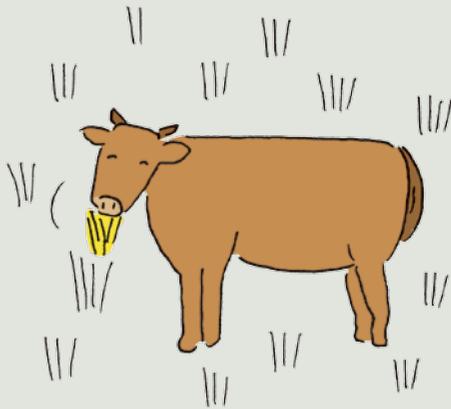
3—コミュニティが持つ可能性

村をつくっているのは人。人の持つエネルギーや知恵が、地域をつくっていくのです。小さな産山村は隅々まで目が行き届く温かさ、大きな家族のような結束の強さがあり、暮らしやすさは大きな魅力となっています。



第2章

考え方と 実現の仕方



2040年

産山村は、かつて小さな村だった。

産山村は、いまも小さな村である。

1 — 2040年の将来像

うぶやま未来計画では、産山未来会議や、住民アンケート、地区座談会や各種団体への聞き取り等によって、多数の住民と産山村の課題や可能性、進むべき方向について、意見を交わしてきました。20年先の産山村はどんな村であるべきなのか?見えてきたのは、20年先の未来も、小さな村のまま、さらなる豊かさを実現していくことでした。

うぶやま未来計画が編まれた2020年、産山村は他の自治体と比べても、正真正銘の小さな村です。私たち村民は、小さいがゆえに一人ひとりの顔が見え、声が聞こえるこの暮らしを選択しました。小さければ、自分たちで決められる。良いことも悪いことも、自分たちの覚悟と決断で道を選ぶことができます。もちろん、そこには幾多の困難もつきまとうでしょう。

私たちは、20年後の2040年になっても、この姿勢を変えず、課題を克服し、小さいことの心地よさを謳歌していきたいと思います。そのための一歩が始まります。みんなで力を合わせ、知恵を出し合い、進んでいきましょう。小さきことは、美しきことと、これからも胸を張って言えるように。

2—2020年宣言

2040年に向かって着実に進んでいくためには、現在からの一步一步がとても大切になります。そこで、2040年までの道のりを10年ごとに区切り、2020年度から2029年度までをより具体的な10年とするため、その指針となる考え方を言葉にしてみました。

2020年宣言

稼ぎ上手、伝え上手、 暮らし上手の村になる

さまざまな課題があります。さまざまな理想があります。
しかし、それをきめ細かく読み解いていくと、解決の道筋が見えてきます。鍵は経済です。
人口の減少も、産業の衰退も、後継者不足も、どれも経済の縮小が根底に横たわっています。
つまり、稼げなくなったことが、複数の課題の原因になっているのです。
可能な限り自力で立つこと。自力で村の経済を立て直すこと。答えはここにしかないと考えます。
それは、農業を中心とした産業支援であり、新規就農を含めた起業であり、
加工品などの開発の推進であり、認知拡大であり、換金の仕組みづくりです。
それらを永続させる広報計画であり、たくさんの産山村ファンを増やす戦略なのです。
私たちは、もっと稼ぎ上手に、もっと伝え上手に、暮らし上手になる必要があります。
問われるのは、知恵の出し方、覚悟の持ち方です。
すべては誇りを持つために。
産山村は、そこを基本として、未来への一歩を踏み出すことを宣言します。

稼ぎ上手？

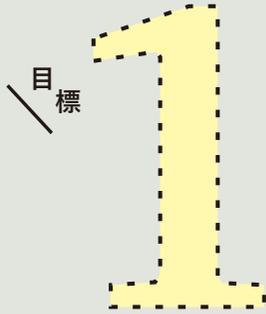
産山村から生み出される農作物などの資源を、村外のたくさんの人々に、時代にあった商品やサービスとして、産山村らしさを守りながら、お金に換える継続的な仕組みをつくること。

伝え上手？

素晴らしい商品やサービスも、素晴らしい風景も、伝えなければ伝わらない。伝わらなければないものと同じ。産山村を内外に発信し、産山村が大好きなファンを増やすこと。

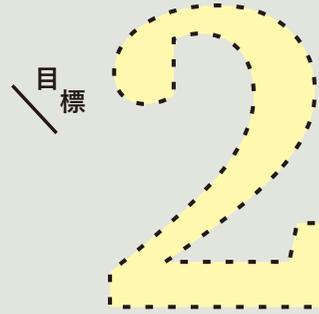
暮らし上手？

自然と共存する産山村の暮らし。昔と変わらぬ農村風景の中に、先進的な教育やIT最先端技術、協働の精神、独自の社会保障までが組み込まれる。自然とともに、世界とともに、ここ産山村で豊かに暮らすこと。



お金を稼ぎやすい環境と 儲かる仕組みをつくる。

農業、林業、商業、観光。なにをやるにしても、その商品やサービスが、消費者に支持されなければなりません。デザインなどを積極的に導入して、儲かる仕組みを定着させます。

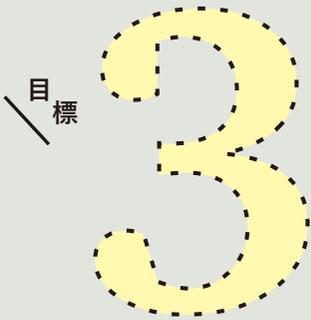


自然環境を活かした 人とお金の流れをつくる。

水に恵まれ、大地に恵まれた産山村。自然環境とそこから生まれる商品やサービスを主軸に産山ブランドの構築をめざします。並行して観光を商品化し、産物と環境アピールの相乗効果を図ります。

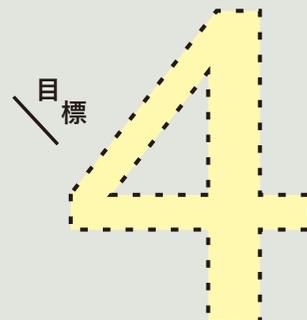
3—4つの目標

2020年宣言を進めていくために、まず4つの基本目標を設定します。一つめが、稼げる村になるための産業支援など、二つめが恵まれた自然環境の活かし方、三つめが子育て環境と教育環境について、最後が安心して暮らせる村づくりについてです。



子どもを産みやすい、 育てやすい仕組みをつくる。

英語教育、国際交流など、すでに活発な教育スタンスに加え、地理的ハンデを解消するオンライン教育への積極的取組みを加速させます。それと同時に、産山ファンの来村、滞在機会を増やし、オンラインの弱点を、現実体験で補完します。

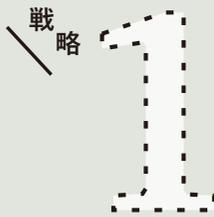


安心して暮らし、誇りを 持てる産山村をつくる。

災害に強く、健康で、美しい村をめざし、産業をつくり、文化を磨き、住みたくなる村、住み続けたい村をつくる仕掛けを考えます。定住者が増えれば、知恵が出て、熱量が上がり、状況が変わります。他の目標との相乗効果、好循環を意識します。

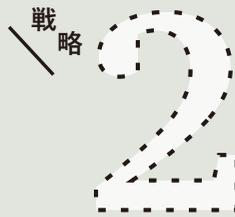
4—6つの戦略

2040年、産山村が、豊かな小さな村であり続けるために、今後10年間は、左の4つの目標を掲げて取り組んでいくことにしました。さらに、4つの目標を達成するために取り組む具体的な方法として、下の6つの戦略を立てています。



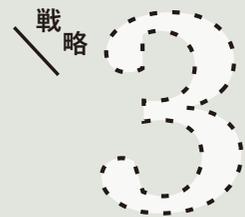
しっかりと稼ぐ ことができる村

農産物、加工品、ツアーまで、デザインなどを導入し、その換金物を磨き、産み出します。



ちゃんと伝える ことができる村

現代社会において、広報力の弱さは致命的です。広報戦略において質と量の向上をめざします。



興味が湧き 訪れたい村

産山村にしかない知的体験型のメニューを開発し、ライバルのいない独自の土俵で、上質のファン獲得に努めます。



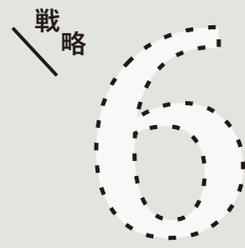
手厚い教育を さらに進める村

自信に溢れた子どもたちが育つ村は、村全体が誇りに満ちて、観光促進の面でも移住・定住促進の面でも有利になります。



移住して来たい 住み続けたい村

楽しそうに稼ぎ、老若男女の笑顔が多い場所に人は惹き付けられます。移住促進は、村が元気であれば、自動的に促進されます。



一緒に頑張り 協働で生きる村

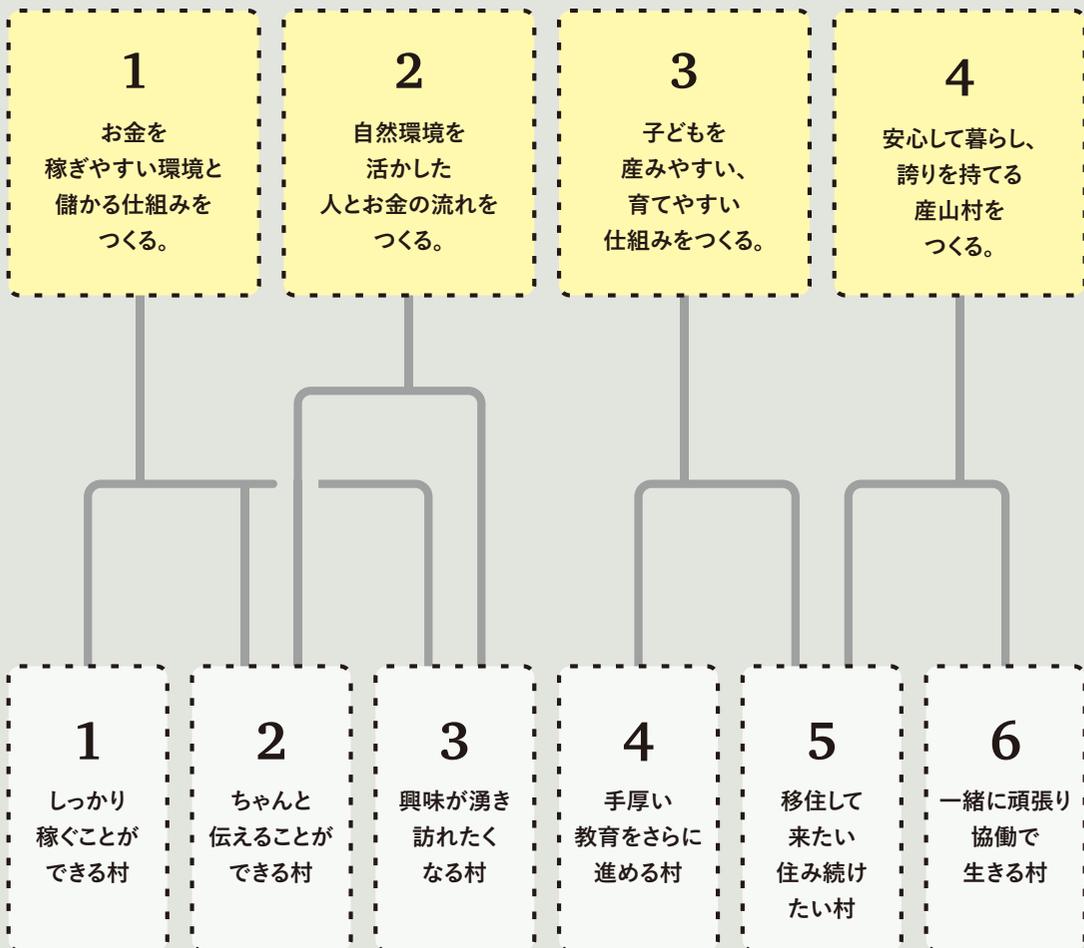
行政だけ、住民だけでやることには限界があります。双方が手をつなぎ、知恵を出し合う協働にこそ大きな可能性が宿っています。

2020年宣言

稼ぎ上手、伝え上手、暮らし上手の村になる

稼ぎ上手、伝え上手、暮らし上手の村になるために、そこへ向かう道筋として4つの目標と6つの戦略を想定しています。儲かる仕組み、人とお金の流れ、安心と誇りを持つ暮らしをめざし、産業、広報、観光、移住、教育、協働の分野で具体化を図ります。

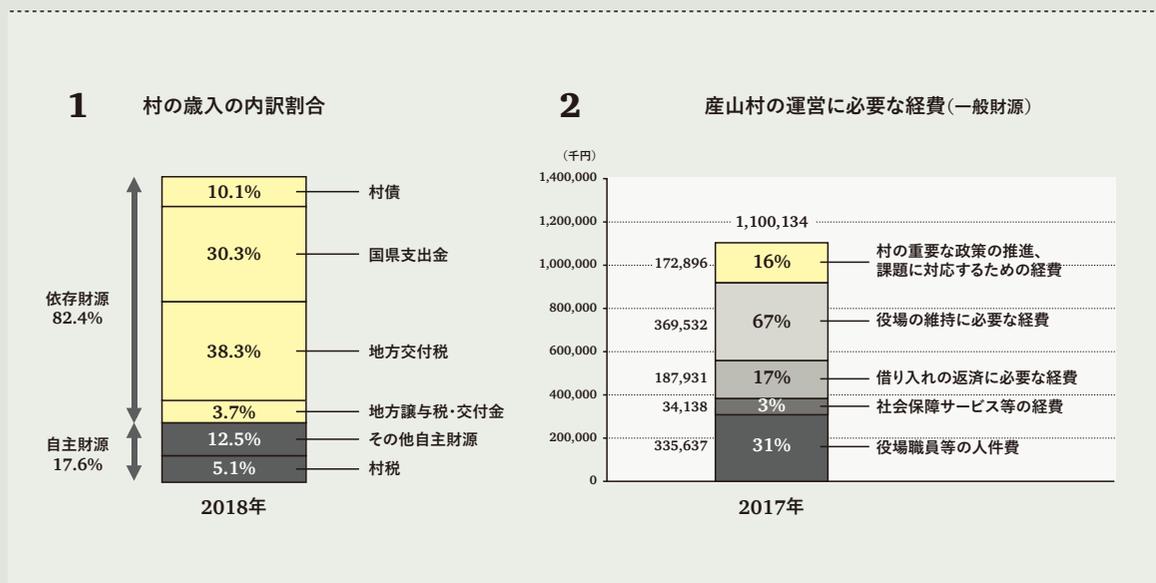
4つの目標



6つの戦略

5— 財政面の現状

産山村は2030年に向かって「稼ぎ上手、伝え上手、暮らし上手の村」になることを宣言しました。この宣言を実行し、理想の産山村をめざすためには、自主財源の割合を増やすことが重要です。2018年の歳入、2017年の歳出を振り返り、村の財政運営の留意点を確認してみましょう。



1— 歳入(村の収入)

産山村の歳入は、住民税や使用料などの自主財源と、交付税や国庫支出金などの依存財源の2種類に大きく分けることができます。今後、人口減少が深刻化すると、自主財源がさらに減ることが予想されます。依存財源は国の政策などにより変動する可能性が高いことから、自主財源の割合を増やすことが今後の課題です。

2— 歳出(村の支出)

産山村の歳入は2017年決算で約26億円となっています。そのうち村が使い道を自由に決められるお金は11億円です。そのお金を「一般財源」と言います。その一般財源の使い道として、職員等の人件費、借入れの返済費、社会保障費等が含まれる「義務的経費」、家計で言えば「固定費」にあたる部分と、村が重要な政策を行うために自由に使うことができる「政策的経費」があります。この政策的経費は2017年度で16%と2割以下となっていました。今後、産山村が実現させようとする取組みを行うための必要なお金(政策的経費)を増やすためにも、義務的経費の見直しが必要になります。

うぶやま未来計画では、4つの基本目標に沿ったさまざまな事業を実施していきます。そのため、毎年「予算編成の仕組み」において、歳入、歳出両方の観点から、うぶやま未来計画の実現に必要なお金「政策的経費」を増やす努力を行っていきます。



山鹿川名称復元



茶摘み

TOPICS

産山学園 の こと

1

9年連続プログラム／小中一貫教育

産山学園は、ひとつの学校として9年間連続して教育を行う義務教育学校に移行した
ことにより、これまで本村が取り組んできた小中一貫教育をより充実・発展させること
ができました。また、校長の1人配置、一つの教職員組織になることにより指導系統が
一本化され、共通指導等がより徹底されています。さらに、PTA組織も一つになり、役員
等を選出しやすくなるとともに行事等の一本化が図られ、これまで以上にPTA活動が
活性化し保護者同士のつながりが強まりました。

村独自の誇りある教育を求めて。

産山村の良いところや強みは、いくつもありますが、これまで行ってきたさまざまな取
組みの中で、特に内外で評価の高い施策
が教育です。今回の村民アンケートや座
談会、聞き取りでも、多くの方がこの点を
指摘しました。人口1,500人ほどの小さな
村で、保育園から始まる英会話教育や永
年続く国際交流、そして地元の価値を学ぶ
「うぶやま学」など、産山村ならではの特
徴あるプログラムが揃っています。ここでは、
その一端をご紹介します。



子ども議会から実現したうぶやま天文台



これまでの 教育の取組

- ・昭和63年度からタイ王国国立カセサート大学
附属中学校とヒゴタイ交流を開始。
- ・平成9～10年度に生涯学習市町村モデル事業指定により
学社融合事業を展開。

子どもヘルパー活動



2

視点を外に開く／ヒゴタイ交流

ヒゴタイ交流とは1988年より始まったタイ王国国立カセサート大学附属中学校との交流のことです。村花のヒゴタイと「肥後の国(熊本)とタイ王国」を掛けた名前で、愛称として親しまれています。これをきっかけに、村独自の英語教育プログラムであるヒゴタイイングリッシュが創設されました。産山村にいても、意識は世界に開かれ、コミュニケーション能力の高い子どもたちを育てています。

3

足下の宝に気づく／うぶやま学

うぶやま学とは、地元を知り、愛し、誇りを持ってもらうためのプログラム。地域との連携や地域人材の活用を通して、体験活動を重視した学習を展開し、子どもたちの心を豊かにするとともに、わが村産山に誇りを持ち、ヒゴタイイングリッシュとともに、内にも外にも視界を開きながら、将来の自己の生き方を考えていく学習プログラムです。



田植え

4

自ら未来を考える／子ども議会

小中一貫教育。英会話教育や国際交流。地元を学ぶ「うぶやま学」など、産山学園の教育プログラムには、いくつもの特筆すべき個性がありますが、中でも9年生による子ども議会は、子どもたち自らが村の未来を考え、提案するユニークな機会です。過去、そこから天文台の開設につながったり、玉来川源流の名称を、本来の山鹿川に戻したり、子ども議会は非常に貴重な経験の場になっています。



村執行部を前に村議会議員が傍聴する中で提案

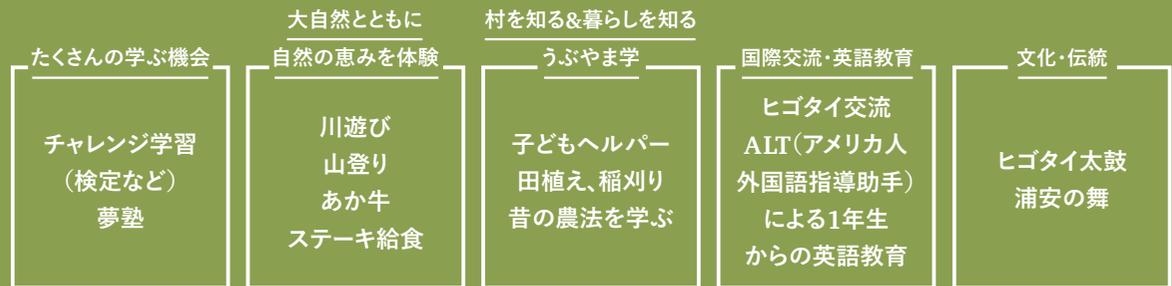


- ・平成12年度から子どもヘルパー事業を開始・継続中。
- ・平成14年度からわいわいヒゴタイ土曜塾開始。
- ・平成16年度から県下に先駆け2学期制導入。

- ・平成19年度に、村内2小学校(産山北部小学校、山鹿小学校)が統合して産山小学校となり、校舎も中学校舎と併設され、これを機に小中一貫教育スタート。

産山学園9年生が考えた
2040 産山学園 みんなの未来計画
 未来の子どもたちが通いたい学園へ

ずっと守り続けたいもの：産山学園オリジナルの教育と体験



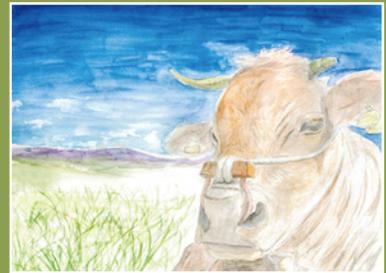
産山学園を存続させるために：産山学園をもっとユニークに



- ・平成21年度から学校支援地域本部事業を展開。
- ・平成21年度にコミュニティースクールの指定、事業展開。
- ・平成22年小中学校全教室に電子黒板等ICT器機を導入。

- ・平成23年度から西日本初の土曜授業スタート。
- ・平成25年度から保育園を教育委員会に移管。
- ・平成27年度から地域が担う学力向上策として「うぶやま夢塾」スタート。

令和元年度に卒業する産山学園9年生より送られた
「産山村の未来」に向けた手紙



「35才の私たちと産山村の未来」

この村で生まれ育った私たち
たくさんの地域の人と触れ合いの中で学び育てられた
村の素晴らしさを私たちはみんな知っている
そして、この愛すべき故郷を残すために何が必要なのかも
20年後私たちはどのようにこの故郷と関わっているだろうか
私たちの大好きな産山村
きれいで、緑あふれる山々の自然、広々とした草原や田畑
透き通った水源、飛び交うホタル
タイの人たちと触れ合い、ここでしかできない絆が生まれたヒゴタイ交流
私たちはここで育ったことを誇りに思う 夢に描いた私たちの素敵な未来
ICTや最先端技術を村の産業に生かしていきたい
時代に合わせ手を取り合い共に生きていく未来がやってくる
共通の願いは雄大な自然に囲まれた活力ある村
みんな幸せで笑顔の絶えない村 これからそれぞれの道を進む私たち
一つだけ言えることは私たちにとって産山村はかけがえのない居場所であること
これから私たちはいっぱい学び、いっぱい経験して産山村に貢献したい
そして、将来胸を張って言いたい 「私たちの故郷は産山村だ」

—————産山学園 9年生一同

- ・平成28年度から放課後児童クラブを開設。
- ・平成30年度から義務教育学校産山学園としてスタート。
- ・令和元年10月うぶやま保育園の保育料完全無償化実施。



第3章

うぶやま 未来計画の 実践



戦略 — 1**しっかりと稼ぐことができる村**

魅力的な換金物がないところに繁栄はありません。農業、林業、商業、観光などすべての産業において、デザインなどを導入し、あらゆる商品とサービスを磨き、新たに産み出すことに、多方面からの力を結集します。

施策1 新規就農を受け入れるために

1000年を超えて守られている産山村の草原。村の宝とも言えるこの自然環境を、次代につなげるため、農業後継者の帰村や新規就農者の受入れ対策を促進します。就農体験など、実際の就農につながるよう包括的な支援を行い、「稼ぐ」農業を実現できる効果的な仕組みを構築します。

施策2 持続可能な農業を確立するために

近年の耕作放棄地の増加は、農地の多面的機能の低下、鳥獣被害の拡大を招いています。今後は農地の集積を進め、ジビエ商品開発等の個体の有効利用を含む鳥獣被害対策を行います。化学肥料、農薬をできるだけ使用しない、環境への影響を配慮した持続可能な農業を推進します。

施策3 農林業所得の向上を図るために

ICT技術を活用した農業生産基盤の整備や農業機械導入の促進、農業用施設の整備を推進し、人的作業の省力化、生産効率の拡大をめざします。また、情報発信を強化し、産山村が持つ類い希な自然環境や産山ブランドの良好なイメージを拡散し、収益向上に繋がる道筋を作ります。

施策4 草地を有効活用するために

2013年に世界農業遺産として「阿蘇の草原の維持と持続的農業」が認定されました。この素晴らしい草地を未来に向かって維持、活用できるよう畜産業の推進を行います。その前提として、産山村の草原で育った「うぶやまのあか牛」の一層のブランド力向上をめざします。

施策5 農業、観光、商業を支援するために

産山村の自然、歴史、農業、食、文化などのたくさんの素材を、統一感のある「産山ブランド」として再構築を図ります。個々の魅力を高めながら、戦略的な広報によって、ブランドイメージを広く社会に広めます。その推進母体となる協議会を設立し、産業全体を支援する仕組みを作ります。

戦略 2

ちゃんと伝えることができる村

事実は情報によって初めて事実になります。高度情報化社会において、広報力の弱さは致命的です。インターネットが普及し、情報発信は容易になっています。同時に、ライバルが多く、魅力的な表現力が試される時代でもあります。ここにもデザインなどを駆使し、質量の向上をめざしていきます。

施策1 産山村の知名度向上のために

どんな魅力的な情報も、相手に伝わってこそ価値となります。今後、産山村はさまざまな情報発信を強化します。広報戦略を立て、体制を整備し、産山村に関する大小の情報を、多種多様な手法で、計画的、戦略的に発信し、誰もが知っている産山村をめざします。

施策2 知らせ、伝える力を高めるために

印刷物にとどまらず、ホームページ、SNS(例:フェイスブック、インスタグラム)など、現代ほど情報発信が多様になった時代はありません。これからの産山村は、情報発信への理解を深め、外部の専門家も巧みに活用しながら、産山ブランドを可視化していきます。

戦略 3

興味が湧き訪れたいくなる村

一般的観光から取って離れ、知的体験型とも言うべき、産山村に続く営みを民俗学的視点でメニュー化、ライバルのいない独自の土俵をつくります。他所での取組みへの追従を避け、足下の素材を掘り起こし、大型バスは来ないけれど、産山村とその風土が大好きなファンを増やす努力をします。

施策1 産山村らしいブランドづくりのために

自然のリズムに合わせた生活そのもの、つまり自然環境、農の営み、歴史や神話を観光と結び付けた民俗学的視点でのメニュー開発などを行い、知的体験を軸とする産山村らしい観光ブランドを築きます。村観光協会の体制を強化し、観光資源の磨き上げと着地型観光を展開します。

施策2 観光客が訪れやすい村にするために

産山村には、村民の憩いの場の温泉や、子どもたちの誇りである天文台など、さまざまな観光資源や施設があります。これらの観光資源を磨き直し、村外の人、国外の人もしっかりと腰を据えて産山村を体験してもらうため、案内板や標識の多言語化、バリアフリー化等の環境整備を進めます。

戦略 4

手厚い教育をさらに進める村

産山村の教育環境はすでに一流と言えるかも知れません。自信に溢れた子どもたちが育つ村は、村全体が誇りに満ちて、観光促進の面でも移住・定住促進の面でも有利になります。この状況をさらに拡充させ、保育園から産山学園まで一貫して質の高い教育を実現していきます。

施策1 0歳～15歳までの一貫教育を推進するために

義務教育学校「産山学園」の創設に続き、今後は、村立保育園の認定子ども園化をめざし、0歳から15歳まで連続性を持った保小中一貫教育を進め、地域と学校が一体となって子どもたちの育ちを支援します。ICTなど最先端技術の積極導入により、子どもたちの学力・資質の向上をめざします。

施策2 世界で活躍する人材を育てるために

「ヒゴタイ交流」事業を背景に、産山学園独自の英会話・英語教育科目「ヒゴタイイングリッシュ」が生まれました。今後も、小さい村ながらも保育園児から小中学生まで、英語や異文化への理解、そして国際的な感覚を身に着けた世界に通用する人材を育てていきます。

戦略 5

移住して来たい住み続けたい村

移住者は、憧れの地に引き寄せられます。楽しそうに稼ぎ、老若男女の笑顔が多い場所に人は惹き付けられます。産山村が自らいっそう元気になることで、移住希望者もまた自然と増えていきます。住む人たちにとって魅力ある村は、来る人たちにとっても魅力ある村なのです。

施策1 村外からの子どもを積極的に受け入れるために

少子化が進み、子どもの教育に注ぐ親の情熱は、ますます強くなっています。自然豊かな環境で、学校・家庭・地域が一体となって、高い教育プログラムを実践する産山村で子育てをしたいと考える親は今後さらに増加するでしょう。山村留学など、社会的ニーズに応える仕組みづくりが重要です。

施策2 移住定住がしやすい村であるために

県内外からの移住定住を促進するため、ワンストップサービスによる相談体制を構築し、相談者に対してきめ細やかなサポートを実施します。また、県や関係団体と連携し、より効果的な情報発信を行います。村内の空き家情報等を収集、データ化し、県内外に発信します。

施策3 ときめく出会いの場をつくるために

自然豊かな産山村で生活していきたいと望む、独身の男女に対して、出会いの場の創出を図ります。産山村のさまざまな魅力を感じるイベントとして仕掛け、観光プログラムでありながら、その共感がきっかけとなって、生涯の伴侶との出会いにつながるような、産山村ならではののどかな機会を作ります。

施策4 産みやすい育てやすい村にするために

若い世代が望む産山村の環境を生かした子育て支援として、安心して子どもを出産し、育てることができるよう妊娠期間中も含めた出産・育児の環境整備に取り組みます。

施策5 医療や介護を行いやすい体制をつくるために

住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるよう医療と介護・福祉の連携を推進し、医療・介護・予防・生活支援を一体的に提供する体制の構築を推進します。

施策6 住民の暮らしと安全をサポートするために

村民が安全に暮らせることができるよう、交通事故や犯罪から村民を守る環境づくりに努めます。併せて、人権が守られる社会の構築をめざすとともに、生活インフラの整備を適切に進めることで、安心して暮らすことができる村を実現します。

施策7 環境にやさしい循環型の社会をつくるために

ごみの分別収集の徹底及びリサイクル、し尿処理と合わせて合併処理浄化槽の補助体系を継続して推進し、60%の普及をめざします。さらに、自然エネルギーの活用、水源涵養林の保全、クリーンエネルギーの推進、化石燃料に頼らないエネルギー供給の仕組みなどを検討し、持続可能な社会をめざします。

施策8 災害に強い地域をつくるために

村民一人ひとりが、防災に対する正しい知識と危機意識を持つために、防災教育・防災知識の普及啓発、消防団・自主防災組織等の育成・強化、災害時避難行動要支援者対策の推進に努めます。また火災、大雨、風水害、地震、火山災害などから、村民の生命及び身体を守るための避難所や、避難を行う道路の改良、消防車両、消防水利、防災無線、治山・治水等施設の整備に取り組みます。

戦略 6

一緒に頑張り協働で生きる村

村には、さまざまな課題と可能性があることを見てきました。行政だけでやれることにも限界があります。住民だけでやれることにも限りがあります。これからは、双方が手をつなぐ協働にこそ大きな可能性が宿っています。大きな家族のように、知恵と力を合わせて、未来へ歩いていきましょう。

施策1 自然景観を守り、継承するために

牧野における牛の放牧は、草原保全に重要な役割を果たす大切な文化です。人口減少や少子高齢化が進む中、その維持継承のためにも、集落の共同活動の維持をめざし、農業と農村が有する多面的機能を保持する取組みを続けます。

施策2 学び続ける産山村であるために

子どもから大人まで、常に何かを学ぶ意欲は、人生の質を高めるためにもとても重要です。多様な興味関心に応じて、充実した生涯学習の機会を作ります。住民が豊富な経験や能力を生かしながら、生きがいを持って地域の担い手として活躍する風景は、元気な村の象徴となるはずで

施策3 高齢者の暮らしを支えるために

歳を重ねても安心して暮らすことができるよう、高齢者の暮らしをさまざまな側面から支援します。特に産山村では、生活維持のため移動手段を車に頼らざるを得ません。高齢者の免許返納も課題となる現代、高齢者ができるだけ車に頼らず生活できるよう、外出支援サービスや移動販売等の生活支援を行います。

施策4 健康長寿に向けた取組みを推進するために

楽しく明るい老後は、健康な心身があればこそ。産山村では、高齢者の病気や怪我の予防に力を入れています。ひとりでも多くの健康な高齢者を増やすために、顕彰事業を推進します。無病息災で天寿を全うする村づくりを進めるため、地域全体で健康づくりに取り組みます。

施策5 障がいのある方々の福祉充実のために

協働の精神は非常に尊いものですが、障がい者の方のサポートは行政に適した事業かもしれません。障がい者福祉サービスの実施主体について、現在の村を基本とする仕組みを今後も継続しつつ、国、県等の適切な支援を受け入れながら、地域における障がい者福祉サービスの均衡化を図ります。

施策6 移動手段を確保するために

高齢化が進む中、買い物難民や医療難民の問題と直結する公共交通のあり方が大きくクローズアップされています。身動きが取りづらい高齢者が増えることで、欠落する生活機能を保全するための新しい公共交通の仕組みづくりを推進します。

施策7 村の拠点とコミュニティをつくるために

過疎によるコミュニティ機能の低下を防ぐため、建物の空きスペースなどを有効活用し、村民のコミュニティ活動の拠点を確保します。また村内外の多世代が交流できる憩いの場を整備し、各集落へと有機的につなぐことで村の拠点エリアづくりを推進します。

最後にこれからのこと

産山村の未来は、みんなで作る。



産山村は熊本県の最北東部に位置する人口1,500人余りの小さな村です。雄大な阿蘇外輪山や大分県の九重連山、祖母山など、美しい風景に囲まれた高原型の農山村です。基幹産業である農業では、米作や高冷地野菜、畜産などが盛んで、緑豊かな草原や全国名水百選の池山水源など、他地域に誇れる豊かな観光資源に恵まれた土地でもあります。

一方で、人口減少、高齢化、産業の衰退もじわじわと進んでいます。小さな産山村を取り巻く状況は、決して楽観できるものではありません。いまこそ、村民が一丸となって、知恵と意欲で次の時代を切り拓く段階に入っています。

この度、今後10年間の計画を考えていくにあたり、村民の皆様とともに、さまざまな課題の抽出を行い、同時にあらゆる可能性の調査を実施しました。それらを産山未来会議の委員の方々とともに検討を重ね、2040年の将来像を定め、2030年に向けた第6次産山村総合振興計画と第2期産山村むら・ひと・しごと創生総合戦略を一体的にまとめたものが本書です。本計画の策定にあたりまして、産山未来会議の委員の皆様はもちろん、村民アンケートや座談会、聞き取り等を通じて貴重なご意見やご提言をくださった、多くの皆様に心より御礼申し上げます。

村民みんなでこの村の未来を考えたこと。
本計画の最大の意義は、そこにあったと信じています。
本当のスタートは、これからです。村民誰もが誇れる産山村が、永遠に続いていくように、引き続き全員で力を合わせて参りましょう。

2020(令和2)年3月 産山村長 市原正文



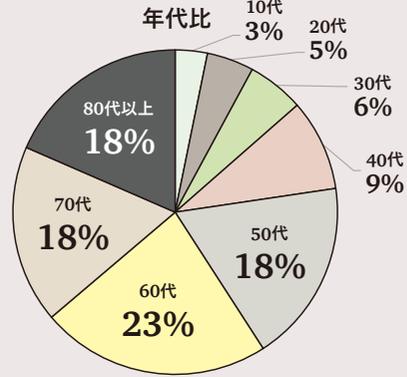
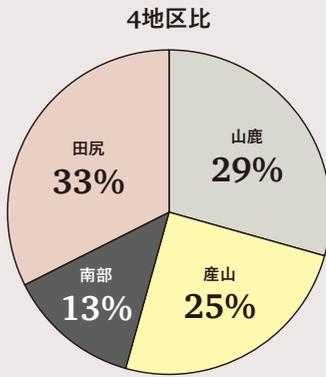
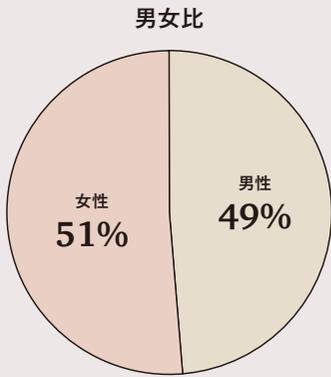
巻末資料

みんなでつくったうぶやま未来計画
——アンケート・聞き取り結果

うぶやま未来計画を作るにあたって、村民の皆さんが産山村について思っていること、“こんな村にしたい”と考えていることを聞きました。そうした声を集めて、うぶやま未来計画ができました。

村民アンケートでは、409件の回答が集まりました。座談会や聞き取り調査では、1,000件を超える意見が集まりました。

アンケート調査=2019年7月/回答数:409件
 地区座談会=2019年8月~9月/4地区開催
 聞き取り調査=2019年9月~12月/14団体



先端技術を用いたスマート農業。／稼ぐ算段が必要。／年間を通して売れる商品を作り出す。／特産品の磨き上げ、演出、発信が必要。／起業支援が必要。村民の所得向上のみならず、移住定住にもつながる。

→稼ぎ上手になる。

村を満喫する体験型観光。／産山学園がタイのカセサート校と交流していることを伝えたい。／産山の教育の良さをPRする。／村の資源である草原や水源といった自然環境を利用した広報戦略が必要。／産山でしかできないことを発信する。

→伝え上手になる。

静かで落ち着いた空間。／自然から生まれた食べ物や飲み物。／子どもの体験活動が豊か。／一足先の地球にやさしい暮らし方をたのしく具現化。

→暮らし上手になる。

理想の産山村としてあがった意見

日本一美しい村。／小さいことが長所になるような暮らし方。／少ない人数ながらも互いにサポートしながら幸せに暮らす村。／人材が産山に残り、将来輝く産山になってほしい。／明るく元気な子どもの声があちこちで聞こえるような賑やかな産山村。／高齢者にやさしい村。／我々は最小だが最大の幸せを掴むことが出来る場所があれば良い。そんな村であってほしいです。

村民の皆さまへ。

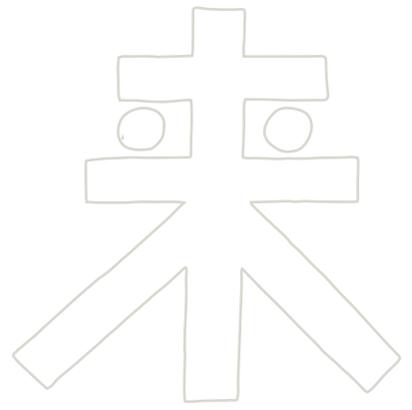
すべてはこれから。

皆さまの声を聞きながら、これからの計画を作りました。
でも、これはあくまでも計画でしかありません。
稼ぎ上手になる、伝え上手になる、暮らし上手になる。
これは、理想論でもきれいごとでもありません。
これは、正真正銘の本気です。

ただし、実現できるかどうかは、
私たち行政も含めた村民一人ひとりの覚悟にかかっています。
いま、計画の中にもあるように、村の財源には限りがあります。
これまでのように、なにもかも行政だけではできなくなっています。
うぶやま未来計画は、冊子を作ることが目的ではありません。
ここからが、すべての始まりです。
みなさん、ぜひお力をお貸してください。

自分のために、みんなのために、子どもたちのために。
ずっと住み続けたい、この小さく美しい産山村のために。





産山未来会議 委員名簿 (敬称略)

村議会: 岩下 德行 / 井 春夫 /

井 芳美 / 城本 俊成 (兼大利区)

産山区: 井 星二

田尻区: 西村 美奈

山鹿区: 高橋 努

片俣区: 池部 奨

産山村老人会: 井 周以知

産山村婦人会: 佐藤 富貴美

産山学園PTA: 森本 春樹

産山保育園保護者会: 井 信雄

産山村商工会: 高橋 康太

産山村観光協会: 井 博明

産山村認定農業者の会: 山部 光一

産山村農業委員会: 嶋井 麻紗誉

生産者出荷組合: 玉利 和代

NPO産山守り人の会: 小川 宏明

うぶやま未来計画

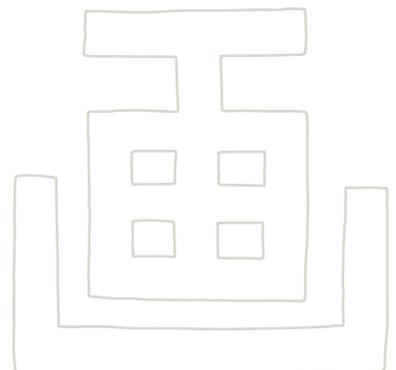
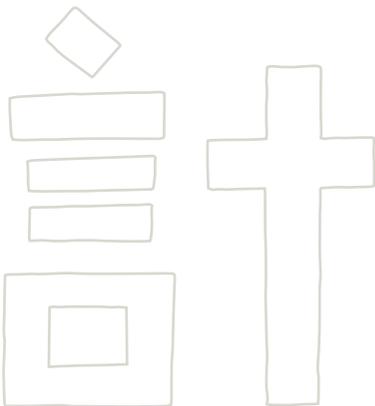
2020(令和2)年3月発行

発行者: 産山村企画振興課

〒869-2703 熊本県阿蘇郡産山村山鹿488番地3

Tel: 0967-25-2211

<http://www.ubuyama-v.jp/>





未

来

Ubuyama Sustainable Community Plan



計

画